

## トレーニングコーチの仕事現場 9

### 東京ボートアカデミーのコーチングから 2

戸田ナショナルトレーニングセンター

トレーニング専門職 長内 暢 春

#### 全日本中学選手権競漕大会に帯同して再考 ～上のカテゴリーに登ってくる選手をどう育てるか～

##### 初めての全中

第 32 回全日本中学選手権競漕大会（7 月 21 日～22 日）に行ってきた。中学生の全国大会を観戦するのは初めてである。小生のように中学生の全国大会について知らない方が多くいると思うので紹介させていただきます。今回の観戦目的は二つ。自ら指導している東京ボートアカデミーの選手の帯同、そして中学生指導者に会ってヒアリングすることであった。率直に何もかもが新鮮であった。一つは、参加団体が二つのカテゴリーからなること。参加都府県は 40 団体で、

中学校で登録参加している校数が 25 団体、クラブとして登録参加しているのが 26 団体で合計 51 団体による大会であった。二つ目に、自艇参加が認められていること。配艇場には、自分たちで運搬してきた艇が目立った。したがって、配艇開始時間の設定や監視場での撮影などが無い。自艇クルーはレース終了後にアッセンブリーをほどこす必要がないので、インターハイでよく見られる次に同艇を使う団体とのトラブルがない。その二つが印象的であった。

##### バトンをつなぐシステム

ロンドンオリンピック閉会式をテレビで観た夜、サッカー女子 U-20 国際親善試合(日本 VS カナダ)が放映されていた。“ヤングなでしこ”と紹介されていた。ベンチにいる監督もピッチにいる選手も“なでしこジャパン”と同じユニホームを来ていた。次世代が上に引っ張られるように育成・強化されている印象を強く受けた。川澄選手をはじめとして、ほとんどの選手が U20 日本代表を経由して今回のオリンピックで活躍しているという途切れなき育成・強化システムがあつてのメダル獲得であることを見逃してはいけない。

『FISA の HP のアスリートのデータベースを見ると、これらの選手の顔写真の下に「ジュニア・U23・

ワールドカップ・世界選手権・オリンピック」の戦績がズラリと並んでいるのがわかります。つまり【継続的に】世界の舞台にたち続けています。(全国高体連ボート専門部 漕跡 2009 p45-47 稲垣喜彦)』。しかし、残念ながら U19 日本代表選手として世界ジュニアに出場した選手が、その後も上位カテゴリーの世界大会に出場しているという関連は決して高くないという分析を稲垣氏は指摘している(詳細は上記文献参照)。中学から高校そして大学・社会人、シニアへと節目をつなぐシステム構築をコーディネートしてほしいものです。他の NF (スポーツ競技団体) の HP に図式化されて解説されているような明快なシステムを。

##### U15 世代のたくましき熱戦

今回、東京ボートアカデミーの久保如竹選手(前月号 No. 8 参照)のコーチングで同行した。日体大監督の鈴木先生からフィリッピをお借りしての参戦となった。結果は決勝戦に進み 4 位だった。優勝は瀬戸淳也選手(美浜中)、2 位が横田聡選手(神戸ボートクラブ)、3 位が石畑修一郎選手(米子漕艇クラブ; ※2009 航跡 p4 参照)だった。瀬戸選手は春の全国選抜で優勝、石畑選手は 2 位、横田選手は 6 位であった。いずれも、

スキルの高さを感じる素晴らしい漕ぎであった。レース後、石畑選手を船台でねぎらうと「長内さん、体幹やってますよ!」と言ってくれた。うれしかった。こんな瞬間、トレーニングコーチ冥利に尽きる。(鳥取県の強化練習で小学校 6 年生なのに参加し、翌日は海でスイスイとスカルを漕いでいた石畑少年)。間違いなく、彼らは高校生になって活躍する。どう育てていくのか。上述した U19 世代と同じように見守っていくシステムが必要だ。



レース前の入念なストレッチ



父でありコーチの久保氏（中央大出）

### 中学生指導者とのヒアリング

大会最終日に中学生指導者にお会いし、情報交換をしました。合うことができた方々を紙面で恐縮ですが紹介させていただき、この場を借りて感謝致します。

（※和歌山ローイングクラブ堅田さん（鳴滝小学校長）、神戸ボートクラブ古米監督（日大出、御子息は

関西高校ボート部）、清風中学校の上田先生&葛本先生、米子漕艇クラブ杉村さん、浜松市立入野中の浅沼先生、潮来市立日の出中学校の浪川先生、美浜中学校の大同先生、島田先生、藤原先生）、奥村大津市議員（中大、元東レ監督）



開会式の様子。





配艇場の様子 自艇参加が認められている。



表彰式と閉会式 入賞クルー全員が種目ごと階段に座っての素敵なセレモニーでした。